

清少納言と差別化の戦略－文学の社会学的考察 The Strategy of Distinction in *Makura no sōshi*

葛 綿 正 一

Masakazu Kuzuwata

今日、文学研究は隣接科学との関連なしには成り立たないという状況にある。ある場合には表象文化研究へ、またある場合は地域文化研究、比較文化研究へと解体吸収されてさえいるのである。国文学研究も例外ではない。国民国家という「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)の創出に貢献してきた国文学研究もまた変容を迫られている。以下は、文学研究と隣接科学をつなげてみようとする拙い試論である。^(註1)

1 清少納言の戦略

枕草子における清少納言の言動はサロンの論理にふさわしいもののように思われる。清少納言の言動はいつも人と違っていて注目を浴びるのだが、そのことによって清少納言の価値は高まりサロン自体も活性化されるからである。それは社会学者ピエール・ブルデューのいうディスタンクシオン(差別化=卓越化)にほかならないだろう。^(註2)つまり差別による卓越化において清少納言はたえずサロンを活性化しサロンの維持再生産に貢献しているのである。紫式部日記のなかで清少納言は「人にことならむと思ひこのめる人」と批評されているが、枕草子にまず読み取るべきは他と異なろうとする差別化の戦略ではないだろうか。

春は曙。

(初段)

この簡潔な断言は差別化の戦略の誇らしげな宣言というべきものであろう。「春」の一語に結びつくのは「曙」の一語しかない。清少納言はたった二つの言葉を結びつけることで他とは異なる自らの感覚を決定的に打ち出してみせるのである。たとえば春には朧月夜というものがあり(「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき」千里集・大江千里)、夏には明け方のすばらしさがある(「夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ」古今集・清原深養父)。また秋には秋の月のすばらしさがあり(「いく世へてのちかわすれんちりぬべきのべの秋はぎみがく月よを」後撰集・清原深養父)、冬には冬の月のすばらしさがある(「いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり」拾遺集・清原元輔)。しかしここではそうしたものをきっぱりと切り捨てるのである。「春は曙」、「夏は夜」、「秋は夕暮」、「冬はつとめて」、この裁断の見事さが枕草子の魅力ということになるだろう。「ぬるくゆるびもていけば(中略)わろし」とあるように曖昧な手緩い表現では不十分なので

ある。

三段の「同じことなれども聞き耳異なるもの」にみられるように微妙な違いを聞き分けること、二二段の「昼ほゆる犬、春の網代、三、四月の紅梅の衣」にみられるように意外なものを分類し配列すること、四段の「思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ」や二一段の「生ひ先なく、まめやかに、えせざいはひなど見てゐたらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて」にみられるように他の階層をからかい、自らの立場を優越させること^(註3)、一二一段の「むとくなるもの、えせ者の、従者かうがへたる」や二九〇段の「うちとくまじきもの、えせ者」にみられるように「えせ者」を落としめること^(註4)、こうしたことはすべて差別化の戦略と考えられる。枕草子に「ねたし」という言葉が頻出するのも、競争意識のせいであろう。そうした点で最も注目されるのは一二六段である。

すこし日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬにふと上様へあがりたるも、いみじうをかし、と言ひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。
(一二六段)

「人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ」とあるように、清少納言は人の気づかないところに強く興味を感じている。したがって、清少納言の感覚の鋭さと呼ばれるものもまた、他と異なろうとする差別化の戦略の一環なのである。枕草子に音声や身体の直接的な現前がみられるとしても、それは差別化の戦略の結果でしかないだろう。

ところで、清少納言は歌人として有名な清原元輔の娘であり、いわば親の七光という文化資本をもって定子後宮に入っている^(註5)。「されど、歌詠むと言はれし末々は、すこし人よりまさりて、そのをりの歌は、これこそありけれ、さは言へど、それが子なればなど言はればこそ、甲斐あるここちもしはべらめ」(九五段)。歌人の娘である以上ほかの人よりもすぐれた歌を詠まなければならないという。他人とは異なることに関して清少納言は非常に意識的なのである。それゆえ、中途半端な歌を詠むことには満足しない。むしろ歌を詠まないことによって目立つ道を選ぶ。

元輔が後と言はるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしきことぞ、たぐひなきや。いみじう笑へば、「なにごとぞ、なにごとぞ」と、大臣も問ひたまふ。

「その人の後と言はれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞ詠ままし

つつむことさぶらはずは、千の歌なりとこれよりなむ出でまうで来まし」と啓しつ。

(九五段)

「その人の後と言はれぬ身なりせば」とあるように、元輔の娘であることを逆手に取って清少納言は歌を詠もうとしない。だが、そのことで、かえって人目を引き付けるのである。元輔の娘であるにもかかわらず歌を詠まない、そうした戦略で自らの存在価値を高める清少納言は父親からの文化遺産を二重に生かしているといえるだろう。あるいは遺産というものは食い潰

すだけでは駄目で創造的に活用しなければいけないという点をよく知っていたのかもしれない。

父との関係だけでなく夫との関係にも清少納言の特異性がみられる。

この、いもうと、せうと、といふことは、上まで皆しろしめし、殿上にも、司の名をば言はで、せうととぞ付けられたる。(七八段)

清少納言と橘則光は夫婦であるにもかかわらず「いもうと」「せうと」と呼び合っていたという。この稀薄な夫婦関係もまた一種の差別化の戦略とみなせないであろうか。その特異な呼称を通して清少納言の言動はますます人々に知れ渡っていくからである。「せうと、こち来。これ聞け」、「言加へよ、聞き知れとにはあらず。ただ、人に語れとて、聞かするぞ」、「いもうとのあらむ所、さりととも知らぬやうあらじ。言へ」などとあるように、「いもうと」「せうと」という呼び名は夫婦二人の間で用いられる以上に周囲の人々によって用いられているのである。

さらに男性貴紳との関係も他人には真似できない特異なものである。そのとき頻繁に言及されるのが漢詩文だが、漢詩文こそ清少納言が他の女房たちとは違うことを示すための切札であろう。差別化の戦略における特権的な武器が漢詩文なのである（だからこそ紫式部はまっさきにそれを攻撃することになるだろう。「さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」という紫式部日記の一節はよく知られている）。「女のすこし我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ、かたらひよけれ」と歌の贈答を嫌う行成は清少納言についてこう言っている。

かく、ものを思ひ知りて言ふが、なほ人には似ずおぼゆる。(一三一段)

行成はほかの女房たちとは違う清少納言の知的な側面を評価しているのである（この時代の知とは漢詩文にはかならない）。もちろん、清少納言の差別化の戦略を支えているのは漢詩文だけではない。なんでもその道具になりうる。碁石にもとづく暗号さえそうである。第一五六段では斉信と清少納言にしかわからない暗号を一生懸命まねしようとする宣方が清少納言の知的優越感を助長している。しかも清少納言は詩句を口ずさむ斉信を誉め讃えるのみで、それ以上の関係になろうとはしない。この点も他の女房たちにはまねのできないところであろう。

わざと呼びも出で、あふ所ごとにては、「などか、まろを、まことに近くかたらひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおぼゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何ごとをか思ひ出でにせむ」とのたまへば、「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにてても、役とあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくくなりはべりなむ」と言へば……(一三〇段)

現実的な恋愛を遠ざけることによって、より雅びやかな擬似恋愛の雰囲気浸ろうとするのが宮廷サロンの特色に違いない。宮廷サロンでは雅びを生み出すために様々な差別化が行使されるのである。^(注6)

雅びやかなサロンの中心にいるのは言うまでもなく中宮定子である。「すべて人に一に思はれずは、なににかはせむ。ただいみじう、なかなかにくまれ、あしうせられてあらむ。二、三にては、死ぬともあらじ。一にてを、あらむ」(九七段)とあるが、清少納言が差別化の戦略を行使して自らの価値を高めるのは中宮定子に認められたいからなのである。機知にとんだ会話や仕草はそのためだけにあるといっても過言ではない。香炉峰の雪の章段(二八四段)でまわりの女房たちは「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめり」と清少納言の機知にすっかり感心している。人の思い寄らないことを実践するのが清少納言である。

二六一段「うれしきもの」をみてみよう。「よき人の御前に人々あまたさぶらふをり、昔ありけることにもあれ、今きこしめし、世に言ひけることにもあれ、語らせたまふを、我に御覧じあはせてのたまはせたるいとうれし」。「御前に、人々、所もなく居たるに、今のほりたるは、すこし遠き柱もとなどに居たるを、とく御覧じつけて、「こち」と、おほせらるれば、道あけて、いと近う召し入れられたるこそ、うれしけれ」。清少納言が「うれしきもの」に挙げているのは自らの卓越性が示される事例が多いのである。

もっとも、初宮仕えの頃の清少納言はずいぶん控え目であるようにみえる。「宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしきことの数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳の後にさぶらふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじう、わりなし」(一七九段)。しかしこの緊張を通して実は定子後宮のすばらしさと自己のすばらしさがともども強調されるのである。定子後宮に参入することがいかに困難であったかを語ることは、結果として定子後宮の卓越性を提示し、またそこに受け入れられた自己の卓越性を提示することになるからである。

差別化の戦略の典型は雪山の賭けにみられる。他の女房たちがみな十日ぐらいしかもたないと言っているのに、清少納言だけひと月は雪山が残ると断言する。

「これは、いつまでありなむ」と、人々にのたまはするに、「十日はありなむ」「十よ日はありなむ」など、ただこのころのほどをある限り申すに、「いかに」と、問はせたまへば、「正月の十よ日までは、はべりなむ」と申すを、御前にも、えさはあらじと、おほしめしたり。

(八三段)

実際は清少納言の言う通りになるのだが、清少納言は他の女房たちとは違うことを主張し自らの卓越化を図っているのである。紫式部であれば、こうした競い合いに進んで参加したりはしないであろう(紫式部は源氏物語朝顔巻に光源氏が「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし」と語る場面を設定しているが、そこでは枕草子とは全く異なる情動的な次元が開かれている)。しかし、「物合、なにくれといどもことに勝ちたる、いかでかはうれしからざらむ。また、我はなど思ひてしたり顔なる人、はかり得たる。女どちよりも、男は、まさりてうれし」(二六一段「うれしきもの」と記しているように、清少納言は勝つことにきわめて熱心である。

2 跋文の戦略

差別化の戦略という点では枕草子の跋文も興味深い。跋文において清少納言はたえず読者のことを気にしている。意識していなかったとわざわざ断るのがすでに意識している証拠であろう。

この草子、目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいのう、人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりしと思ひしを、心よりほかにこそ、もり出でにけれ。 (跋文)

「人やは見む」と反語表現が使われているが、人が見る可能性を十分意識しているのではないか。わざわざ隠すというのは人に見られる可能性を十分意識してのことであろう。「心よりほかにこそ、もり出でにけれ」とあるが、その事態こそ望んでいたに違いない。

宮の御前に、内の大臣のたてまつりたまへりけるを、「これに、なにを書かまし。上の御前には、史記といふ書をなむ書かせたまへる」など、のたまはせしを、「枕にこそははらめ」と申ししかば、「さは、得てよ」と賜はせたりしを、あやしきを、こよやなにやと、尽きせず多かる紙を書き尽さむとせしに、いとものおほえぬことぞ多かるや。 (跋文)

史記に対して枕とあるように、すでに枕草子は競合関係に入っているものであり、既成のものとは違う何かを書くことが最初から清少納言には課せられていたのである。

おほかた、これは、世の中にかしきこと、人のめでたしなど思ふべきなほ選りいでて、歌などをも、木、草、鳥、虫をも、言ひいだしたらばこそ、思ふほどよりはわろし、心見えなりと、そしられめ、ただ心一つにおのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと、思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人は、心のほどこそ、おしはかるれ。ただ人に見えけむぞ、ねたき。 (跋文)

当たり前のことを書いていたのでは「思ふほどよりはわろし、心見えなり」と非難されるだろうと予測する清少納言はすでに人に読まれることを意識していることになる。だから清少納言は当たり前ではないことを書き続けなければならないのである。書いたものは意外にも評判がよかったというのだが、清少納言は謙虚なようできてここでもっとも誇らしげである。逆に読者に対して攻勢に出る。「人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしと言ふ人」、そういう読者の心理はお見通しだという。なぜなら、それに近い戦略を多用していたのはほかならぬ清少納言自身だからである。先回りして手を打ちさえするその戦略は完璧である。清少納言の言葉はすべて差別化の戦略として読まれなければならない。とすれば、次の言葉もまたそれにふさわしく逆に読む必要があるだろう。「ただ人に見えけむぞ、ねたき」。「ねたし」という言葉には清少納言の強い競争意識が露呈しているが、人に見られたのは策略通りだったのではないか。

左中将、まだ伊勢の守ときこえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子、乗りて出でにけり。まどひ取り入りしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ、かへりたりし。それよりあるきそめたるなめりとぞ、本に。

(跋文)

清少納言はついうっかり見られてしまったのではなく、見せるためにそうしたのであろう(畳と紙は清少納言の大好きなものである)。作者が不本意だったと語っている流布が実は作者の本意だったのであり、こうした跋文をつけること自体が他と異なろうとする差別化の戦略として機能しているのである。

3 サロンの競合

これまで述べてきたように、枕草子にみられる裁断の美学、感覚の鋭さ、分類配列の意外性、漢詩文の引用、会話や仕草の機知などはすべて自らの価値を高めサロンを活性化しようとする清少納言の差別化の戦略として位置づけることができる。さらに清少納言たちが夢中になっている仲忠涼優劣論もその一環とみなしうるだろう(このゲームに参加しえない者は排除される)。そして古今集をすべて暗記した女御が清少納言たちの理想となる。

村上の御時に、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一条の左の大臣殿の御女におはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。まだ姫君と聞えける時、父大臣の教へきこえたまひけることは、「一には、御手を習ひたまへ。次には、琴の御琴を、人より異に弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌二十巻を皆うかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」となむ、聞えたまひける……

(第二〇段)

「人より異に」という点に注目したい。書、琴、歌、こうした教養を洗練させる者は優位に立てると大臣は考えていたのであろう。教養は差別化のもっとも基礎的な部分を構成しており、サロンはそれに磨きをかける。差別化こそサロンという場の力学なのである。サロンでとりわけ重視されているのが会話と手紙である。会話は言うまでもなく手紙にも工夫がこらされる。定子後宮と齋院サロンの手紙のやりとりをみてみよう。

「それは、いづこのぞ」と問へば、「齋院より」と言ふに、ふとめでたうおぼえて、取りてまいりぬ。(中略)「齋院より御文のさぶらはむには、いかでか急ぎ上げはべらざらむ」と申すに、「げに、いととかりけり」とて、起きさせたまへり。(中略) 齋院には、これより聞えさせたまふも、御返りも、なほ心異に、書きけがし多う、御用意見えたり。

(八三段)

齋院の中將君が「文書きにもあれ、歌などのをかしからむは、わが院よりほかに、誰か見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひ出でば、わが院のみこそ御覧じ知るべけれ」と手

紙に記していたことが紫式部日記に出てくるが、斎院のサロンはもちろん定子後宮もそうした自負をもって挑んでいたのであろう。斎院にも定子後宮にも華やかな社交場といった雰囲気があり、そこでは差別化の戦略が華々しく繰り広げられていたのである。斎院については「いとをかしう、よしよしうおはすべかめるところのやうなり」、「斎院などやうの所に、月をも見、花をもめづる、ひたぶるの艶なることは、おのづからもとめ、思ひてもいふらむ」と紫式部日記に記されている。^(注7)

4 戦略の破綻

清少納言は差別化の戦略によって自らの価値を高めサロンを活性化する。しかし差別化の戦略はあくまでも共同体内部のゲームにとどまっていなければならない。共同体の許容量を越えたときは自殺行為に等しくなる。

殿などおはしまさで後、世の中に事出で来、騒がしうなりて、宮もまいらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、なにともなく、うたてありしかば、久しう里にいたり。(中略)「いさ、人のにくしと思ひたりしが、またにくくおぼえはべりしかば」と、答へきこゆ。(中略)さぶらふ人たちなどの、「左の大殿方の人、知る筋にてあり」とて、さし集ひものなど言ふも、下よりまいるを見ては、ふと言ひやみ、放ち出でたるけしきなるが、見ならはず、にくければ、「まゐれ」など、たびたびあるおほせ言をも過して、げに久しくなりにけるを、また、宮の辺には、ただあなた方に言ひなして、そら言なども出で来べし。(一三八段)

定子後宮の中で道長方とみられた清少納言はサロンから仲間はずれにされてしまう。差別化の戦略を実践し続けた清少納言は、越えてはならない一線を越えてしまったことになる。そのとき共同体は露骨に差別を行使する。清少納言はいわば自らの戦略によって敗北していくのである。その意味で清少納言は差別化の戦略の犠牲者といえるかもしれない。^(注8)

共同体に従属するほかない差別化の戦略には二つ危険性が存在する。一つはいま見たように共同体の限界を越えてしまう場合であり、もう一つはその共同体自体が消滅してしまう場合である。^(注9)紫式部日記には有名な清少納言批判があるが、紫式部は差別化の戦略の危険性をよく理解していたというべきであろう。

かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。(九〇頁)

差別化というのは共同体の中のゲームであるからその共同体が消滅したときには何の支えも

ないということになる。待ち受けているのは悲惨な末路である。^(注10)ただ一つ残されたものがある
とすれば書くことであろう。失われた共同体の記憶を書き続けること、それが清少納言の仕事
となる。

こうして差別化の戦略という観点からみると枕草子という作品も清少納言という人物の言動
も一貫して解釈できるように思われるのである。機会があればさらに卓越化のレトリックを詳
しく分析してみたい。

注

- (1) 以下の引用は『枕草子』（石田穰二氏校注、角川文庫、1979年）および『紫式部日記』（山
本利達氏校注、新潮古典集成、1980年）による。また和歌の引用は『新編国歌大観第三巻』
（角川書店、1985年）による。
- (2) 『ディスタクシオンⅠ・Ⅱ』（石井洋二郎氏訳、藤原書店、1980年）や石井洋二郎氏
『差異と欲望』（藤原書店、1993年）を参照。貴族の行動様式や思考様式についてはノルベル
ト・エリアス『宮廷社会』（波田節夫氏他訳、法政大学出版局、1981年）も参照。また後宮
やサロンについては『後宮のすべて』（国文学第25巻13号）、『クラブとサロン』（NTT
出版、1989年）などを参照。
- (3) 平安女流文学の作家の多くが受領の娘であることはしばしば強調されるところである。二
一段で清少納言は女房になることを勧めているが、天皇家や摂関家との婚姻が不可能な状況
では女房になるということが受領の娘にとって上昇するための唯一の選択だったのであろう。
しかし、紫式部は清少納言とは異なる方法を選択したかったはずである。清少納言は女房で
あることを積極的に意味づけているが、紫式部はそうではない。「口惜しう、男子にてもた
らぬこそ幸なかりけれ」と父親を嘆かせた紫式部はむしろ律令的な官人として出仕すること
を理想としてしていたように思われる。
- (4) 枕草子の笑いはたぶんに攻撃的な面をもっているが、それも差別化の一環だからであろう。
生昌や方弘を容赦なく笑うことで清少納言はサロンを活性化しているのである（五段、五三
段、一〇四段）。ただし、枕草子の笑いの攻撃的な側面だけを強調するのは当たらないだろ
う。生昌邸に赴くことになったときすでに定子の華やかなサロンは崩れかけていた。したがっ
て清少納言たちの笑いは卓越したサロンの存在を前提にした余裕のあるものではなかったは
ずである。むしろ笑うことで必死にサロンの存在を守ろうとしていたように思われる。その
意味で枕草子の笑いの防御的な側面にも目を向けるべきかもしれない。攻撃による防御もま
た枕草子における笑いの役割なのである。なお、枕草子の笑いについては原岡文子氏「『枕
草子』日記的章段の「笑い」をめぐって」（『源氏物語両義の糸』、有精堂、1991年）や三田
村雅子氏「〈語り〉と〈笑ひ〉－伝達と距離－」（『枕草子表現の論理』、有精堂、1995年）

を参照。

- (5) 藤原公任の新撰髓脳には「是は深養父が元輔に教へける歌なり」として一首が掲げられているが（日本歌学大系第一巻、風間書房、1958年）、そうした歌の教えは清少納言にも伝えられていたに違いない。
- (6) 「みやび」を支えているのは、こうした差別化の戦略ではなかろうか。「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という伊勢物語初段の用例でもすでに他との競合が前提とされているし、伊勢物語では「ひなび」との対比を通して「みやび」が浮かび上がってくるからである。「みやび」に関する論文は少なくないが、いずれも審美的な観点から論じているために「みやび」の戦略を捉えそこなっているように思われる。「みやび」は実体として存在するものというよりも、他と異なろうとする戦略と考えるべきである。万葉集の「梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ」（八五二）という用例では、他とは異なるものという自己規定がみられる。源氏物語の「三日がほど、かの院よりも、主の院方よりも、いかめしくめづらしきみやびを尽くしたまふ」（若菜上）という用例でも他との競合がみられる。興味深いのは宇治十帖の用例である。「もはら顔容貌のすぐれたらん女の願ひもなし。品あてに艶ならん女をば願はば、やすくえつべし。されど、さびしう事うちあはぬみやび好める人のはてはては、ものきよくもなく、人に人ともおほえたらぬを見れば、すこし人に譏らるとも、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり」（東屋）と語る左近少将は際限のない「みやび」の競争から脱落し、むしろ物質的な安定を求めているのである。
- (7) よく知られているように、大斎院前の御集には「かくつかさづかさなりてのち、ものがたりののかみうたのすけはうたづかさこそかくへけれとて、ものがたりののかみうたのすけに／うちはへてわれぞくるしきしらいとのかかるつかさはたえもしなむ／かへし／しらいとのおなじつかさにあらずとておもひわくこそくるしかりけれ」（九四、九五番）とあって、斎院が一種の文芸サロンを形成していたことがわかる。なお、大斎院サロンについては三田村雅子氏「女性たちのサロン大斎院——サロンを中心に」（国文学平成1989年8月号）が示唆に富む。
- (8) このあたりの分析は拙稿「平安朝文学史の断面——権力・エロス・言葉——」（沖縄国際大学文学部紀要国文学篇34号、1994年）と重なるところがあるので、あわせて参照されたい。
- (9) 共同体の同一性に従属することのないものを差異化、共同体の同一性に従属してしまうものを差別化というように、とりあえず用語を区別しておく。大鏡には隆家が大斎院選子を「追従深き老ぎつねかな」と罵る場面があるが、帝四代にもわたり斎院として雅びやかなサロンを維持し続けた選子には、実は越えてはならない限界が存在していたのである。選子は一定の枠の中にいたからこそ、華麗な差別化の戦略を実践しえたといえるだろう。
- (10) よく知られているように、赤染衛門集には「元輔がむかしすみけるいへのかたはらに、清少納言住みしころ雪のいみじくふりて、へだてのかきもなくたふれて見わたされしに／跡も

なく雪ふるさとのあれたるをいづれむかしのかきねとかみる」(一五八番)とあって、清少納言の晩年の落魄をうかがわせる。卓越化に失敗した清少納言は「へだてのかき」を失っているのである。

The Strategy of Distinction in *Makura no sōshi*

Masakazu Kuzuwata

This paper is a sociological study of *Makura no sōshi*.

Makura no sōshi (The Pillow Boook) was written by SeiShōnagon in the 11th century. The behavior of SeiShōnagon in *Makura no sōshi* is always outstanding.

That is “la distinction,” which was presented by Pierre Bourdieu. I interpret her behavior as the strategy of distinction.

The contents of this paper are as follows:

1. Strategy of SeiShōnagon
2. Strategy of Epilogue
3. Competetion of Salons
4. Failure of Strategy